

特集

協同組合間協同、そしてその「先」

「協同組合間協同」という原則が「協同組合原則」に盛り込まれたのは1966年のことである。当時、ヨーロッパなどの生協は営利企業との市場競争に苦戦し、組織・事業・運動の再建に取り組んでいた。そこで新しく導入された概念が、協同組合同士で可能な限り統合を進めて規模の利益を図るとともに、協同組合同士で連携することで営利企業には不可能な協同組合らしい事業を展開しようという「協同組合間協同」である。これを機に、ゆっくりした歩みではあるが、日本においても同種協同組合間での連合・合併や異種協同組合間での協同組合間連携事業（たとえば産直事業など）が目論まれ、実行されることになる。

それから半世紀を経て、「協同組合間協同」にはさまざまな課題が指摘されている。協同組合の合併による大規模化こそが組合員の協同組合離れ、そして協同組合の組合員離れの原因ではないか。同じ協同組合同士といっても、消費者の協同組合の利害と生産者の協同組合のそれとは正反対ではないか。そんな意見さえ飛び交うのが協同組合の現場である。国際機関が唱える「組合員と地域社会のための協同組合間協同」という理念は、現実にはどのように展開され、発展し得るものなのか。

本号では、日本協同組合連携機構（JCA）の発足を機に、「協同組合間協同、そしてその『先』」を特集してみた。

1. 食をめぐる協同組合間協同ー JA 東とくしまとコープ自然派の事例から（加賀美 太記）
2. 森から考える協同のネットワーク（竹野 豊）
3. 地域社会の課題に協同組合間協同で立ち向かう
ー兵庫 JCC の取り組みと協同組合横断的な人的ネットワークの形成（下門 直人）
4. 協同組合間連携の新段階における協同組合法（多木 誠一郎）
5. 食品分野における中小企業組合の新展開
ー福島県食品産業協同組合に着目してー（則藤 孝志）
6. 市民社会の中における生協の県連を考える（三浦 一浩）